

第2章 社協ボランティアセンターの使命・役割(ミッション)と特性

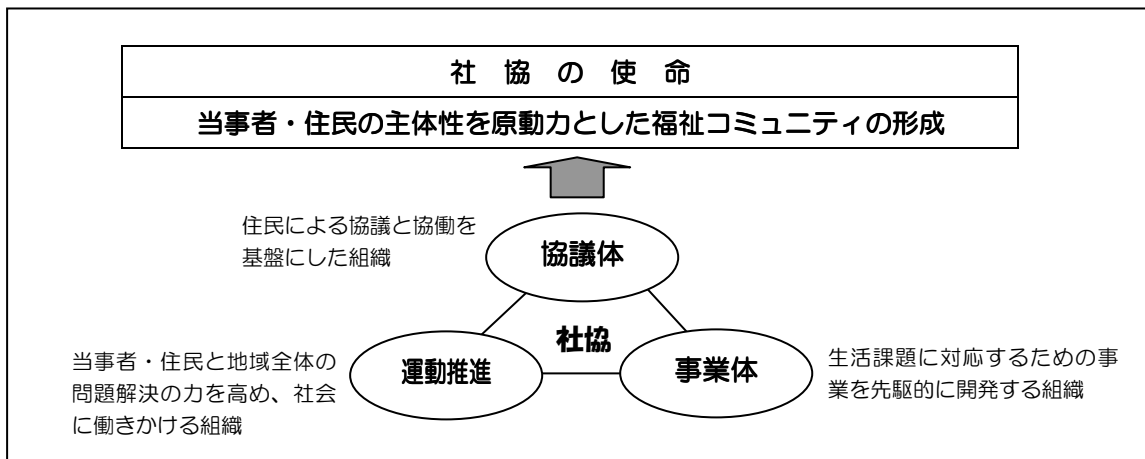
第2章では、社会福祉協議会の使命・役割との関係から、社協ボランティアセンターの位置付けを明確化するとともに、その使命・役割(ミッション)と特性を明らかにします。

1 社協の使命と役割(ミッション)

社会福祉協議会の使命と役割は、「市町社協地域福祉推進計画～ささえあうまちづくり推進プラン4～」で、以下のように表現されています。

「社協の使命は、当事者・住民の主体性を原動力としながら、生活課題を抱える一人ひとりが地域の一員として、自分らしくくらせる地域社会(=福祉コミュニティ)づくりをすすめること」

社協の使命と3つの特性



コラム 「地域福祉経営」を目指す社協

ささまち4のキーワードの1つに、「地域福祉経営」という言葉があります。「地域福祉経営」とは、住民が地域のビジョンを描き、その実現に向けて、地域内のさまざまな資源を開発したり、活用したりしながら、それらの活動を持続的に発展させる取り組み全体を指しています。

今回の「ささまち4」では、社協が、法人自体の経営のみならず、住民や行政、関係機関と共に地域の福祉力を高める「地域福祉経営」をめざすことが強く提起されています。

関連資料紹介

兵庫県社会福祉協議会 発行
「市町社協地域福祉推進計画～ささえあうまちづくり推進プラン4～」
2005年3月 (問い合わせ：兵庫県社協地域福祉部 078-242-4634)

地域福祉を住民がデザインしていくための、今後5年間の「地域福祉推進の羅針盤」を目指して作成された市町社協向けの指針書。
本報告書の第2部は、この「ささまち4」の分野別計画指針という位置づけです。



2 社協ボランティアセンターの使命と役割（ミッション） ～3つのエンパワメントを支援する～

社協ボランティアセンターは、「一人ひとりが住み慣れた地域で、いつまでも安心していきいきとくらす福祉コミュニティづくりに向けて、当事者、住民、市民の主体性をボランティアな活動を通じて引き出したり高めたりすること」が中核的な役割といえ、それにより「住民・市民の自治力が高まること」を目指しています。

その役割を担っていくため、社協ボランティアセンターは地域福祉を進める人づくり、組織・拠点・仕組みづくりを通じて、3つのエンパワメントを支援します。

(1) 地域福祉を進める人づくり

- ① 当事者のエンパワメントを支援
- ② 住民・市民のエンパワメントを支援

(2) 地域福祉を進める組織・拠点・しくみづくり

- ③ 地域のエンパワメントを支援

①当事者のエンパワメントを支援

当事者の想いを受け止め、問題解決力を高め
自立生活の実現を支えるはたらき

②住民・市民のエンパワメントを支援

住民・市民の「想い」に火をつけ、
活動や育ちをサポートするはたらき

③地域のエンパワメントを支援 (福祉コミュニティ形成)

地域に共感を広げ、地域で支える仕組みをつくるはたらき

コラム 「エンパワメント」とは

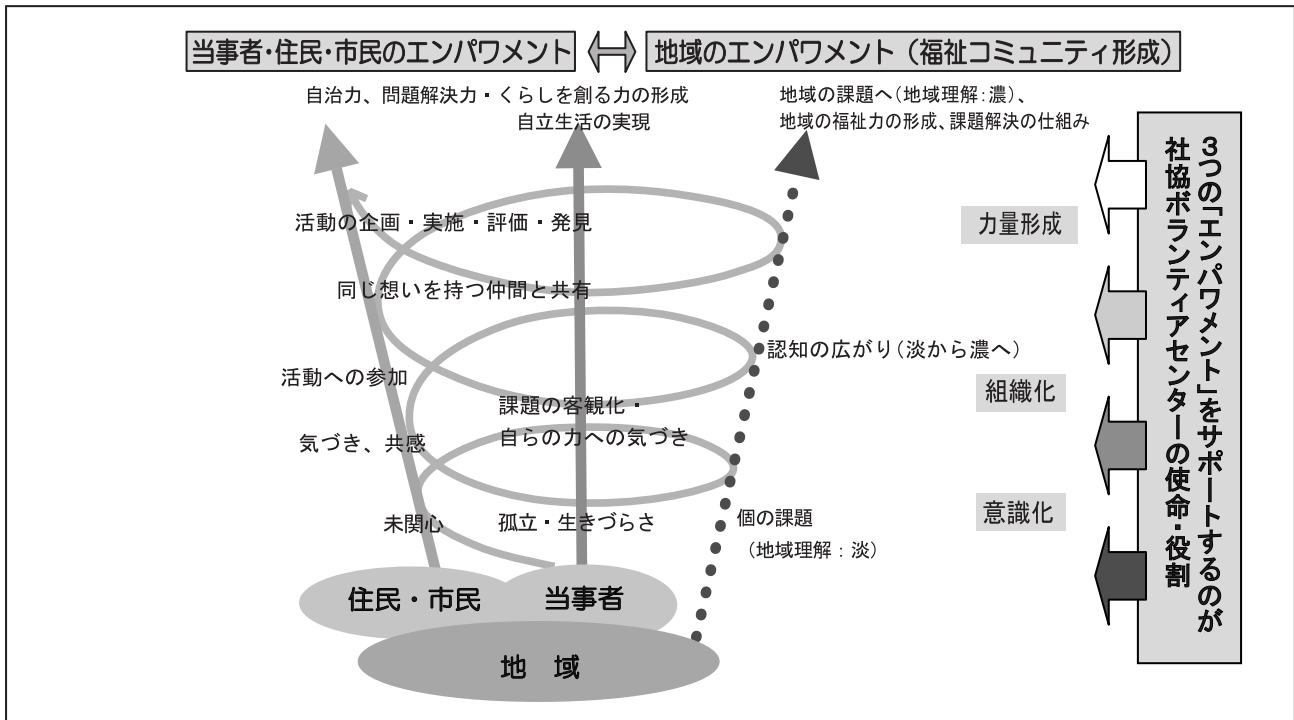
「エンパワメント」(empowerment)とは、「何らかの理由で発揮できないでいる、本来の自分のあり方や力を取り戻す、回復する」という意味を持っています。

「エンパワメント」は次の通り定義されています。

「人とその人の環境との間の関係の質に焦点をあて、所与の環境を改善する力を高め、自分たちの生活のあり方をコントロールし、自己決定できるように支援し、かつそれを可能にする公正な社会の実現を目指す過程のこと」

(山縣文治／柏女霊峰編「社会福祉用語辞典」ミネルヴァ書房、2003年より抜粋)

図：地域福祉を進める人のエンパワメントと福祉コミュニティの形成（変容のプロセス）



（１）ボランティアな活動を通じて地域福祉を進める人づくり

～価値を持ち、自立的な地域づくりを担う人づくりに向けて～

社協ボランティアセンターの目指す「福祉コミュニティ」づくりを担っていくのは、支援機関の職員ではなく、その地域で暮らし続けていく生活者自身です。

生活主体者である住民・市民の中で、「誰でも安心していきいきと暮らし続けることができるまちづくりを進める」という目的に共感し、地域で動きながら、自分たちでまちをつくる人を、各分野・各地域ごとに掘り起こし、生み出し、その育ちを支援していくことが、社協ボランティアセンターの大切な役割といえます。言い換えると、「エンパワメントを支援する」こと、つまり、当事者をはじめ、住民・市民が本来持っている気づく力、共感する力、発展する力や問題解決力を伸ばしていくことを、側面的に支援することです。

また、ボランティア活動をきっかけに、活動者が課題を感じ取ったり、自らの役割に「気づく」ための支援が大切です。第1部の「活動の発展プロセス」の表でも、出発点は「未関心」であり、“「気づき」は「変わる」ことへ出発点”であるからです。自らの内発的・能動的な「気づき」から、主体的にものごとを考えられるようになっていきます。「気づき」から「考え、行い、振り返って考え、発見し、新たな行動につなげていく」という過程を、繰り返しながら活動していくことこそが大切なのです。そのような人が増えていくほど、「住民・市民の自治力が高まっていく」ことにつながっていきます。

また、社協ボランティアセンターには、「常に動き続けている地域の動向に目を配り、新たに生まれてくる課題に対応していく」という使命があります。それは、「常に地域の新たな生活課題に対応

し、現在ない支援や人材、しゅきを創り出していく」役割を担うことです。そのため、常に新しい地域の生活課題を受け止める姿勢と、新たな生活課題に住民・市民が「気づく」ための支援、ボランティア活動が自立的に発展していけるような支援を展開していくことが求められます。

コラム「気づきは変わることの出発点！」

例えば、「手話に関心がある」という人がいれば、手話の技術を習得するだけではなく、手話を必要とする方が地域でどのようなことに困っているのか、地域にある生活課題に自分で気づいてもらい、その上で、自分に何ができるのかを考えてもらうことが大切です。その活動そのものではなく、「活動の先に人がいる」という、「活動が必要とされている地域の生活課題に目を向ける」という視点が大切です。

(2) 地域福祉を進める組織・拠点・しゅきづくり

～ボランティア活動を通じた人の育ちを、地域のしゅきづくりへ広げる～

社協の支援スタイルは、当事者の持つニーズを中核としながら、「一人でできないことをグループで、グループでできないことを地域で」というように、地域にひろげ、地域の中に「土壌づくり、人づくり、しゅきづくり」を行う視点を大切にしています。

具体的には、生活課題を感じている、または想いや夢を持つ個人を中心にしながら、福祉学習等を通じ、周辺の住民・市民の気づきを支援すること（意識化）、想いを持つ仲間たちで学習や活動の推進母体をつくること（グループ化、組織化）、そして、他の主体との連携・協働を通じて共通の想いを持つ仲間を増やしていくこと（連携・協働・ネットワーキング）です。

その過程を表現すると、「個の課題」を原点に、関係する人々が共感し、参加しながら地域全体に段階的に広がっていく、らせん状（スパイラル）の動きを地域で推進していくイメージです。課題に対する直接的な解決（タスクゴール）のみを求めるだけではなく、課題に対応する「過程」と、そこで紡がれていく「関係」にこだわることに特徴があります。

社協ボランティアセンターは、「過程」と「関係」をキーワードに、2つの目的を重視します。

まず、地域の住民や関係機関が課題を共有し、解決していく過程に参加し、共に協議したり、試行錯誤するプロセスを経験する中で、課題の解決に向けた意識が醸成され、また経験により知識や技術が蓄積されていくことを目的とすることです。これを、「プロセスゴール」といいます。

そして、取り組みを共に進める過程を共有することで、人々や組織の間に関係性が紡がれていくことを目的とすることです。この目的を「リレーションシップゴール」といいます。

「プロセスゴール」と「リレーションシップゴール」の2つの目的を目指すことにより、ボランティアな活動を通じた人の育ちを、地域の仕組みづくりに広げていきます。

コラム 過程と関係性を重視した「コミュニティワーク」

地域福祉を推進するための社会福祉援助技術を「コミュニティワーク」といい、「一定の地域社会で生じる地域住民の生活問題を地域社会自らが主体的・組織的・計画的に解決していけるよう、コミュニティワーカーが側面的援助を行なう過程及びその方法・技術」と定義されています。（山縣文治／柏女霊峰編「社会福祉用語辞典」ミネルヴァ書房、2003年より抜粋）

プロセスゴール、リレーションシップゴールを重視したコミュニティワークの手法として、「コミュニティ・オーガニゼーション」（地域組織化：Community Organization）が挙げられます。コミュニティ・オーガニゼーションは、次のように定義されています。「地域社会が自ら、そのニーズと目標を発見し、それらに順位を付けて分類する。そしてそれを達成する確信と意志を開発し、必要な資源を内部・外部に求めて実際行動を起こす。このようにして、地域社会が団結・協力して実行する態度を養い育てる過程である」（M.ロス、岡村重夫訳、1969）

社協ボランティアセンターは、福祉活動専門員と共に、「コミュニティ・オーガニゼーション」の手法を通じて3つのエンパワメントを支援する役割を持っていることができます。

● 市町社協ボランティアセンター職員が考えるボランティアセンターの「キーワード」

以下は、本委員会において、市町社会福祉協議会の職員を中心とした委員が、自らの社協ボランティアセンター等を振り返って「キーワード」を出し合ったものです。自身の関わるボランティアセンターのキーワードを考える際の参考にしてください。

<「気づき」の提供>

- 福祉への「気づき」を提供する。
- ボランティア活動を通じて、地域の現状、地域の課題に気づく。(春日町)
- 気づきの支援、学習の場
⇒地域に生活する一人ひとりが持つ生活課題に気づくことから、そのことへの共感や解決に向かうようなきっかけや、仕掛け作りが必要。まずは「知る」。(村岡町)

<つながり・ネットワークづくり>

- 自分だけでなく同じ思いを持った人たちとつながっていく。(春日町)
- 共通理解や共感できる関係団体と活動の輪を拡大する。(春日町)

<まちづくり>

- だれもがその人らしく活かされて生きることができるようなまちづくり(宝塚市)
- 障害者、高齢者をはじめとするすべての市民が共に地域社会でくらし続けるためには市民が一体となって支え合う必要がある。また、当センターは関係機関と協力し、市民のボランティア意識が高まるよう啓発に努め、誰もが住みよいまちづくりを目指す。(加西市)

<地域課題の解決>

- 地域の課題を解決するために自分に何ができるか振り返って考える。(春日町)
- 福祉ボランティアの育成・活動支援を中心としつつ、地縁活動、セルフヘルプ活動、NPO 法人活動、福祉以外のボランティア活動など多様な活力を、「福祉のまちづくり」に結集し、地域ニーズの解決に努める。(三田市)

<情報提供>

- 市民活動やボランティア活動に誰もがアクセスしやすいよう、効果的な情報提供を行う。(宝塚市)
- 市民活動・ボランティア活動の総合的な情報提供を行う。(神戸市)
- 市民全体が自由に幅広い分野で参加できるよう啓発や情報提供を行い市民総ボランティアを目指す。(加西市)

<地域福祉>

- 地域福祉と関連、連携し地域の支援者、ボランティア活動への理解者の増を図る。(加西市)
- 地域福祉推進の重要な役割を担う。(神戸市)

<その他>

(市民参画、市民自治、活動開発機能、生活圏域での支援)

- 市民参画、市民自治(宝塚市)
- 最初はないものをつくっていく活動
⇒草の根的活動(村岡町)
- 次は、できた「あるもの」を土台にして類似したものをつくっていく活動(村岡町)
- ある程度コマが揃ったら、分野を広げるための活動(村岡町)
- 「心のケア」施策では補えないところを心掛けや見守りにより住民の日常生活範囲で支援する。(加西市)

委員会「ホームワーク」より

3 社協ボランティアセンターの特性分析（強み、弱み）

社協ボランティアセンターがボランティア活動支援拠点としてその使命・役割を果たすべく、常に変化する状況に対応していくためには、「常にあり方を見直し、柔軟に変化できる体制づくり」が不可欠です。そのため、自組織のどの部分をどう見直し、進化させていくのかを考えると、まず関係者で自分の組織がどのような特性をもつ組織なのかを認識し、共有することが大切です。

地域の様々な状況、関係機関との関係を考慮しながら組織特性を認識した上で、組織の持つ特性を「強み」として活かしていくこと、また一方、特性が「弱み」となる場合には、課題化を図り、その克服や強化策を講じていくことが重要です。

社協ボランティアセンターが、その他のボランティア活動支援拠点と大きく異なるのは、社協を母体組織に持っていることといえます。以下では、「社協ボランティアセンター」に共通する特性について、数点を挙げてみます。

- 「住民主体の協議体」であること
- 「福祉コミュニティづくりに向け、地域の福祉力を育む」という目的を持っていること
- 「当事者組織の組織化」と「支援者組織の組織化」の両方に関われ、両方をつないでいけること
- 地域に根ざした組織であること
- 社会福祉分野の専門性、ネットワークを有していること
- 「個別対応」できること（⇨行政は制度や公平主義にとらわれる）

以上は、「社協」という組織からくる特性の例ですが、実際には各市町の社協の「特性」は、地域性や、その時代の情勢、どの機関と比較するのかによって、大きく変化します。（例：行政との比較と、民間の支援機関との比較では、その特性は大きく異なってきます）

様々な機関との関係の中で、社協ボランティアセンターがその使命・役割を有効に果たしていくとき、自組織の特性のどれが「強み」となりうるのか、また「弱み」は何か、その上で、「強み」をより活かしていくための方策づくり、「弱み」があれば、どう対応していくか、さまざまな場で是非話し合ってみてください。

市町社協ボランティアセンター職員が考える社協ボランティアセンターの「強み」と「弱み」の例

以下は、本委員会ならびに共有ミーティングにおいて、市町社会福祉協議会の職員が自らの社協ボランティアセンター等を振り返り、「強み」と「弱み」を出し合ってみたものです。自組織の「振り返り」の際の参考にしてください。

| | 強み | 弱み |
|----|--|--|
| ヒト | <ul style="list-style-type: none"> ・民生委員さんや給食サービスボランティアさん等、社協だからこそ「地域の人の資源」と出会える。 ・社協として小地域福祉活動を組織化して進めていくなかで、学習会も行っている。一部の人だけでなく、全体に広がりつつあり、ボランティア活動の理解や、実際の活動にもつながっている。 ・兵庫県内では必ず社協にボランティアセンターがあり、コーディネーターがいること。 ・住民に社協に対する、共感してくれる理解者が多い。 ・コーディネーターの思いを分かってくれるボランティアが何人かいる。 ・ボランティア活動者が地域での見守り役等になっていくくれる。 ・ボランティアとして協力してくれる（地域の）人材が豊富である。 ・いろんな人とのつながりが多いので色々な視点からの意見が得られる。 ・センターをサポートしてくれる事務ボランティアがいる。 ・スタッフと事務ボランティアの関係が良い。 ・豊富なマンパワー⇒幅広い活動に対応できる。 ・共感できる人間関係の構築 <p>⇒住民（当事者）から信頼を得られやすい。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアと共同での事業では、段取り進行をまかされ、結果としてボランティアの力が伸びるのを半減させることがある。 ・若年層のボランティア参加が少ない。 ・職員が少ない ・ボランティア活動を推進する人材が不足している。 ・担当職員1人では、日々の業務に追われ、センター強化という分野に手が回らない。 ・全てのVをコーディネーター1人が把握できない。たすけてー。 ・単独のコーディネーターであるため、自分の考えだけで働いてしまう場合がある。 ・コーディネーターがその業務を抱え込みがち。 ・VCが事業兼任しているため、100%の業務がしにくい。 |
| モノ | <ul style="list-style-type: none"> ・様々な品物を寄せていただける。 ・活動の場の提供や、設備の提供はしやすい。 ・拠点施設が充実している。 | <ul style="list-style-type: none"> ・場所や機材を貸し出したり、配分をするときのルールづくり。 |
| カネ | <ul style="list-style-type: none"> ・公的であるために、資金的なものは他の組織より恵まれている。 ・公的であるために、企業等からの寄付金が集めやすい。 ・年度ごとの補助金がある。 ・発想を実現できる可能性がある。お金を使う自由がある。 ・社協は行政にとってなくてはならない組織であり、現在は人件費や事業費が確保されている。 ・社協は住民と行政の間であって、民間性、柔軟性がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ・コスト意識が弱い。 ・運営経費の財源がない。 ・資金に限りがあり、グループに補助金が出せない。 ・補助金が保障されているから、改革が進まない。 ・予算が少ないので事業がやりにくい。 ・役所の予算編成に左右される。 |
| 情報 | <ul style="list-style-type: none"> ・情報発信が行いやすい立場にある。（広報誌、町内行政放送の活用、役場と身近な関係の為、役場からの発信もできる状況にある。） ・身近な存在であるため、当事者グループの方のニーズ、思いがボランティアセンターにへ入りやすい。 ・地域を知る為の情報提供機関との連携が密にできる。 ・同様の業務の担い手が（他団体）すぐ近くで活動している。 ・専門員とともに地域やボランティアセンターの仕事をしている。⇒情報が共有されているので発信もしやすい。 ・行政と同じフロアにあり行政の福祉情報が得られやすい。 ・ケーブルTVでの放送料が無料。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動者は限られてしまっている。 ・きめ細かい住人のニーズが入って来にくい。 ・他の支援組織の情報が入ってこない。 |

| | | |
|---|---|---|
| <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">ネットワーク</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアコーディネーターとしての顔が住民に認知されている。（住民とのつながりは強い） ・社協間のネットワークで様々な情報や支援方法が寄せられる。 ・地域性が強く、顔と顔でつながっている関係。知っているから、声かけられるし、頼めることが強み。 ・学校や地縁団体とのつながりがある。 ・横のつながり、協働、連携がとれる。市民活動センター、当事者団体、社会福祉法人（施設等）、地域など。 ・NPO 法人、コープこうべからの信頼がある。 ・社協という事で広い声かけがしやすい。 ・県内にボラセンのネットワークがある。 ・民生委員とのつながりがある。 ・ボラ活動者や他のボラセンの中核的な存在となりうる。 ・行政とのつながりが強い。 ・地域福祉活動と連携しているので、地域からのニーズに対してコーディネートがしやすい。 ・福祉系以外にもイベント出演ボランティアがあり、文化芸能関係のつながりがある。 ・月 1 回情報共有のための連絡会の組織がある。ボランティアも安心して参加・協力できる。 ・当事者のニーズは社協（中立）を通してボランティアにつなぐ仕組みがある。ニーズに根ざしたコーディネートができる。 ・当事者⇒学校⇒学生ボラネットワークでつなぐ事ができる。 ・さまざまな分野のボランティアと関わりがある。 ・地縁団体・組織とのネットワークを作りやすい。 ・どんな所でも顔出しに行ける柔軟さ。 ・小地域たすけあい活動の中に V 活動も含んでいる。小地域との関わりが大きい。 ・自治会組織や民間連とのつながりが強く、地域課題に対応しやすい。 ・地区センター、在宅介護支援センター、介護保険施設、精神保健相談機関等を社協のネットワークの中に持っている。 ・ケアマネなど福祉系専門職とのネットワークがある。 ・行政、関係団体（民協、老人クラブ等）とのネットワークがある。 ・行政の福祉分野（介護、子育て）が同じ施設内にある。 ・福祉的ニーズを持った団体や機関とのネットワーク情報の共有化ができる（地域ケア会議等） ・他社協ボランティアセンターとのつながりがある。 | <ul style="list-style-type: none"> ・V 連絡体と VC 登録という制度の中で、V 連絡体の機能が薄れている。 ・福祉団体以外（JC、NPO 法人等）とのつながり、関わりがない。 ・有償活動など、新たに福祉活動の主体となってきた団体との関わりが薄い。 ・個人としてのつながりはあるが、センターという組織のつながりにはなっていない。 ・福祉分野以外の分野のグループや協会とはつながっていない。 |
| <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">組織</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・啓発活動、きっかけづくり、グループの立ち上げ支援などノウハウが豊富である。 ・しっかり「あなたの声を聞きますよ」という傾聴の姿勢がある（ニーズを持っている方、活動者両方） ・ボランティアを組織化、体系化する機能、能力がある。 ・知名度が高い。 ・専門職が多くいる。 ・地縁団体、自治団体等の協力が得やすい。 ・公共性。住民からの信頼がある。 ・社協は、行政の親戚（下部組織）と思われている事が、社協活動を行う上での強みである。（公共的性格の強さ） ・組織としての財政力が整っているため、協力や活動が受けやすい。（信頼性の確保） | <ul style="list-style-type: none"> ・社協職員の中で VC の位置づけが理解されにくい。協力が得にくい。 ・社協内でもボランティアセンターが何をしているのか理解されていない。 ・職員の中で意識の統一化がなされていない。（ボランティアセンターの使命、役割が組織の中で理解できていない） ・センターの“本来的役割”の議論さえできていない。 ・ボランティア事業を社協全体として取り組んでいない。（コーディネーター 1 人で一生懸命やっている） ・社協のトップの考えや理解、組織としての協力が得られず 1 人ぼっちで悩み立ち止まることが多い。 ・所長がいらない(?)。相談できる、アドバイスしてくれ |

| | | |
|---|---|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・「社協」という名が安心感を与えている。 ・ボランティア推進事業などが住民や関係団体から前向きに受け入れてもらえる雰囲気がある。 ・合併を目前に地域・組織が結束してきている。 ・支部、役員組織がしっかりしている。 ・歴史はある。それなりの知名度はある。 ・安心と信頼がある。 ・地区センターと連携がしやすい組織体系になっている。 ・市の窓口的役割を担っている。(災害支援、募金活動他) ・ボランティア協会との統合により相談窓口が一本化、市民の混乱は軽減された。また手話等指導者の登録も増え活動メニュー、分野も増えた。 ・地域福祉推進室にボランティアセンターを設置しているため小地域福祉活動とボランティア活動をつなぐことができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・人がいない。 ・認知度が低い。 ・組織の枠組みがしっかりしているため、トワイライトゾーンなどへの柔軟な対応が難しい場合がある。 ・社協の両輪の一つでありながらボランティアコーディネーターだけが動いていて社協全体の意志統一ができていない。 ・「ボランティアセンターに関すること」という一つの分掌の中で、担当だけにかかってくる、他に協力を求めにくい。 ・社協職員としての価値観・問題意識がうすれてくる。(センター業務が中心) ・事業(NPO活動、セルフヘルプなど)を理解している職員に限られており、職員により説明の質に差がある場合がある。 ・社協全体の意志統一ができていない。 ・福祉行政の補完的役割を果たしているのみ。(現状) ・社協としての組織の方向性や役割についての自覚が、日々の業務で意識されなくなっている。 ・営利組織よりも組織基盤(キビシサ)が少ない。 ・様々な団体間の調和を図ることを求められるが、独創的な事業展開が難しい。 ・変わりつつある地域の実態に、組織がついていけない状況がある。 ・“福祉”に足を引っ張られている。 ・行政の委託事業、補助事業が多い。 ・社協VCは役場、行政の一部と住民から思われる。 ・民間からみたら、堅い部分がある。 ・社協が表に出て、ボラセンが住民に知られていない。 ・自己完結してる所がある。社協内の目線と他からの目線はすごく違うと思うが、自分たちのいい様に思い込んでいる部分がある。 ・行政が主導で、市民団体連絡協議会を設立した関係で、NPOや市民団体との連携が弱い。 ・福祉分野の社協事業については、ボランティアに委ねている傾向がある。ボランティアの自発性を損ねることにつながる。 |
| <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">分野</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・社協だと福祉分野の色が濃い、ボランティアセンターだと中性的な色になる。 ・社会福祉分野に強い。 ⇒人材の紹介、活動のアドバイスができる。 ・幅広い福祉関係者の参画が得られる。 ・福祉的視点で考える⇒生活課題から活動を見つける。 ・公共性の強さを活かし、子育てグループなど新しいボランティアの組織化支援や育成ができる。 ・活動場所を提供できる(作業所跡地、等) ・活動分野ごとのニーズを拾って、ボランティアの育成をしていきやすい。 ・福祉分野については、介護教室などを開き、推進に貢献しやすい。 ・障害者、高齢者、児童等に偏った支援をしていない。 | <ul style="list-style-type: none"> ・守備範囲が福祉分野に限定している。 ・定番の在宅福祉サービスにしばられている。 ・市民から見ると福祉分野のボランティア活動はボランティアセンター、生涯学習関係の活動は市教委というような色分けがある。 ・ボランティア講座を趣味の会と勘違いされる場合がある。 ・社協の中のボランティアセンターには福祉分野のイメージが強い。NPO、市民活動団体は他の中間支援組織とのつながりが強くなる傾向がある。 ・ボランティアということばに高齢者、退職者の活動というイメージが強く、そのイメージは「福祉」のとらえ方にも共通している。 ・市民から見たボランティアセンターのイメージが固定化している⇒福祉分野のみの支援、行政の一部、と捕らえられがちである ・待ちの姿勢になりがちで、積極性にかける部分がある。(他分野、これまで関わりを持っていない機関への働きかけが弱い) |

- ・幅広いボランティア活動支援が整っている。
- ・地域密着型事業を展開している。
- ・住民やボランティア活動者の信頼がある。
- ・ボランティア共済の受付等を通して、福祉分野以外のグループ等も把握することができる。
- ・他支援団体とは違い、市民がまず相談してみようと、来所することが多い

- ・支援が登録ボランティアに偏っており、他分野の方が来館された際に伝えられるメリットが少ない・確立されていない。
- ・Vグループの自主性が原則だが、支援がないと動けないというグループも多い。
- ・すべてではないが、過保護なことが自主性の低下につながっている。
- ・ボランティア活動は自主性、自発性と言われながらも登録者へのコーディネートの際「お願いできませんか?」と依頼型になることが多い。
- ・助成金が旧時代的。(予算は総額のみであるべき、助成団体の中の社協(地域福祉)への貢献度、申請書類の質の差、判断基準の不足)
- ・どこまでをボランティアにお願いするのかというのが不明確。
- ・活動後のフォローが不足している。(特に個人ボランティア)
- ・拠点の課題。役所内にボランティアセンターがある。
- ・“事業ありき”になりやすい。

関連資料紹介



東京ボランティア・市民活動センター発行 (TEL:03-3235-1171、定価 800 円)
 「ボランティア・市民活動センター強化プラン作成ガイド
 ボランティア・市民活動センターの変革をめざして」2003年3月

ボランティアセンターの機能やあり方を見直し、強化プランを作成していくのにむけた手順やポイントを、事例やワークシートを用いてわかりやすく解説しています。センターのこれまでを見つめ直すときに、「強み」「弱み」分析などが活用できます。